

教師の授業コミュニケーションの実際

——小学校教師の発話にみる授業コミュニケーション——

芳賀 明子

帝京短期大学 生活科学科

【抄録】

【問題・目的】

今や、新たな知識や情報の獲得や何らかの技能の習得方法は、インターネット上に提供されているさまざまなコンテンツによって、可能である。しかし、インターネットを活用し、知りたいことを知るためには、言語を活用する能力や見通しを持つ力が不可欠である。また、非対面型のコミュニケーションが、生活の中に深く入り込んできたことは、これまで以上に言語の活用能力と、言語の背景にあることの推理能力の必要性が増している。今後、非対面によるコミュニケーションが、社会生活に増大することを考えると、直接的なコミュニケーションによる伝達を受ける経験自体が、重要な意味を持つと考える。学校教育の中でのコミュニケーション経験は、いっそう大きな意味をもってくる。故に、教師の「伝え方」の技能は、重要な教師としての資質能力である。

児童生徒にとって「伝達のされ方」は、学習内容の獲得に大きな影響がある。にもかかわらず、このことについての教師の側の論理的・意図的な研修は無いといってもよい。筆者は、「伝えること」それ自体に焦点を当てた研修が必要だと考え、これまで、授業コミュニケーションと位置づけ、授業コミュニケーションの理解に立った研修について研究を行ってきた。今回は、教師が日常行っている授業（研究授業のような検討・準備されたものでない）の授業コミュニケーションの実態を整理し、授業コミュニケーションの課題と改善の方向を明らかにするとともに、授業改善の支援となる方策の手掛かりを得ることを目的として、研究を行った。

【キーワード】 発話、授業コミュニケーション、授業コミュニケーションの実際、授業コミュニケーション分類

I. はじめに

令和3年1月の中央教育審議会答申は、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～というタイトルで発表された。

この答申に強調されていることは、タイトルにもある通り、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の2点である。

答申に示された「個別最適な学び」の中で、「新たなICT環境や先端技術の活用等による学習の基盤となる資質・能力の確実な育成」が挙げられている。そして、「『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多

様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要」としている。「協働的な学び」についての説明は、従来の集団における学習の方向とほぼ同様の内容であるが、今回特に強調されている「個別最適な学び」を情報技術の活用で推進するという方針は、これまでも示されてきた内容を進めて、更に具体化を目指すものとしてとらえられる。

社会における技術革新の進み方は著しく、学校はこの流れに適応することが急務となっている。タブレットの全員配布など情報機器の導入は進んだが、それらを活用しての学習指導の具体化は、緒についたばかりと言ってもよい状況

にある。これまでの「黒板とチョーク」＝「ノートと鉛筆」の授業から、「キーボードと画面」の授業へと移行が進むことが予測される現在、学習—教授についての考え方も変わっていく必要がある。

今や、新たな知識や情報の獲得や何らかの技能の習得方法は、インターネット上に提供されているさまざまなコンテンツによって可能である。学校を中心とする教育機関だけが、学びの場ではなくなっている。

しかし、インターネットを活用し、知りたいことを知るためには、言語を活用する能力や見通しを持つ力が不可欠である。これらは、どのように培うことが必要なのだろうか。

また、大人の社会では、ペーパーレスが進み、対面でないコミュニケーションが多くを占めるようになってきている。ChatGPT やクラウドでの情報蓄積などの技術の進歩によって、知識や情報の取り扱い方には、大きな変化が起きている。非対面型のコミュニケーションが、生活の中に深く入り込んできて、これまで以上に言語の活用能力と、言語の背景にあることの推理能力の必要性が増している。

そして、子どもたちもこうした技術革新の成果による生活の変化の中で、この流れになじんでいるように見える。大人が思うよりも素早く馴染んでいくのではないと思われる場面も少なくない。

では、子どもたちが技術革新の成果に適応するためには、学校教育は、何をどのように変化させていくことが求められるのだろうか。

非対面型の、コミュニケーションを適切に処理していく基盤には、コミュニケーション活用の基礎的な知識の獲得と具体的なコミュニケーションを通しての学習経験が必要である。学校での学習は、他者と共にあって学びを経験していくことによって、コミュニケーションスキルを身に着けていくものである。言語の活用能力及び予測・推理能力は、教材・教具の活用のみで獲得されるわけではない。発達を踏まえた教育計画に沿って適切な教材教具の選択を行い、教師が教室で活用して、児童生徒にさまざまな能力が培われている。

中でもコミュニケーションスキルの多くは、教師を含む集団の中で培われていると言える。初等教育が担ってきた役割は、「具体的」に学ぶ

ことに意味がある。

故に情報科学の進歩の中、具体的ななかかわりの中で学ぶ場としての初等教育は、ますます重要になると考える。

中教審に示された「個別最適な学び」には、学習に要する時間も学習内容の獲得の量も、個々の興味関心への尊重も、含まれている。これらを調整して、集団＝社会に適応できる能力として培うためには、人が対面で関わり、モデルとなって示していくことが必要である。学校における対面での指導は、児童にとって学び方の学びであり、一般的なコミュニケーションの基礎となる、学びに必要なコミュニケーションを培うものである。そして、教師自身の授業におけるコミュニケーション能力は、これからの時代を担う子どもたちの学習コミュニケーションモデルとなる能力として位置づけたい。一人ひとりの子どもにとっての「個別最適」な学びの過程と、教師自身を含めた「協同」の学びを具現化するという役割は、これまで以上に専門性として重視されなくてはならない。

教師の役割は、「コミュニケーションを通して、何かの価値（知識技能）を児童生徒に伝える」ことにある。

このコミュニケーションは極めて重要な技能であるが、明確な解明の方法は示されていないし、教員が自らの授業におけるコミュニケーションを自覚できる手掛かりも少ない。

先にも述べたが、今後非対面によるコミュニケーションが社会生活に増大することを考えると、直接的なコミュニケーションによる伝達を受ける経験自体が、重要な意味を持つと考える。教師は、指導内容と指導計画についての知識理解をもつことは当然である。その上で、指導内容をどのような「伝え方」をするのかは、いっそう重要な教師としての資質能力となる。特に初等教育初期の段階にある学習者（児童）や学校移行直後の学習者（生徒）にとって、伝達のされ方は大きな影響がある。しかしながら、このことについての教師の側の論理的・意図的な研修は無いといってもよい。

筆者は、「伝えること」それ自体に焦点を当てた研修が必要だと考え、これまで、授業コミュニケーションと位置づけ、授業コミュニケーションの理解に立った研修について研究を行ってきた。今回は、これまでの授業コミュニケーショ

ン研究を基に、日常の授業コミュニケーションがどのような様相であるのかを整理し、課題を明らかにすることを目指した。

II. 研究の目的

教師が日常行っている授業（研究授業のような検討・準備されたものでない）の授業コミュニケーションの実態を整理し、授業コミュニケーションの課題と改善の方向を明らかにするとともに、授業改善の支援となる方策を見出すことを目的としている。

Table 1. 調査対象

	担任学年	記録教科	
教師 1	1学年	国語	算数
教師 2	2学年	国語	
教師 3	4学年	国語	算数
教師 4	4学年	社会	
教師 5	4学年	国語	社会
教師 6	4学年	算数	
教師 7	5学年	算数	社会

Table 2. 授業コミュニケーション分類（抜粋）

教授内容に関するカテゴリ	学習内容伝達	11. 目標・進行の共有	授業の目標や進め方を伝える。目標を共有する
		12. 説明	授業に登場する知識・技術に関する説明をする。
		13. 提示	授業に登場する知識・技術に関する情報を視覚的に示す。整理して示す。
		14. 指示	活動を指示する
	理解把握	15. 閉じた質問1	そのときに目にしている部分に答えを見出せる内容について質問する。ほとんどの場合、答えが一つに限定される質問をする。
		16. 閉じた質問2	直近の指導内容から答えを見いだせることについて質問する。これまでの学習経験を想起して答える質問をする
		17. 開かれた質問	既習内容やこれまでの学習経験から独自に答えを生み出す内容について質問する。これまでの学習内容を総合して答える質問をする
		18. 確認	取り上げた内容について、記憶しているか確かめる。

III. 研究の方法と対象

1. 研究対象

都内公立小学校教員名の通常の授業

2. 研究の時期

202X年4月から202X年7月

3. 研究の方法

上記7名の教員の通常の授業を録音し、スクリプトを作成し、授業コミュニケーション分類（2021, 芳賀）に基づいて分類した。

4. 研究の内容

(1) 授業の録音

筆者が、協力者のもとに出向き、授業を録音した。

記録した授業は、協力者の希望した時間帯と教科である。

教室外で、録音機を装着してもらい、担任が教室内で日常行っている授業と同じ状態で、記録してもらった。その際、担任教師以外は教室に入っていない。

授業終了後直ちに、録音機を回収した。

(2) 授業スクリプトの作成

録音した授業音声を、書き起こしソフトを用

いて、書き起こしたのち、書き起こしソフトでは対応できていない箇所について、録音の聞き取りを行い、修正し、正確を期した。

(3) 授業スクリプトの分類

作成したスクリプトを、授業コミュニケーション分類に基づいて、分類した。

今回は、教科に関する発話の分類を行った。

分類項目は、Table 2 に示したとおりである。

(4) 発話の検討

発話記録全体の質的検討を行い、授業コミュニケーションの全体像を把握した。

本論文では、紙面の都合で、4学年の国語の授業の一部を事例として取り上げている。

発話自体の検討が、本研究の目的であり、教師個々の特徴や傾向を明らかにし、授業改善を図るための方法としての有効性を確認することを目標としている。

IV. 倫理的配慮

研究者が、記録対象者に個別に研究の目的を説明し、理解と協力を願うとともに、管理職の許可を得て、録音を行った。協力者に対しては、個別に分析の結果を伝え、結果を生かした授業コミュニケーションの改善についての協議を行った。

V. 結果

1. 教科授業における授業コミュニケーションの実態の把握

今回、記録した授業は、3教科11単位時間である。

3教科のそれぞれの授業コミュニケーション分類の個数をカウントし、全体的な傾向を把握することとした。

(1) 国語科の授業における授業個コミュニケーション

授業コミュニケーション分類7項目中、最も多かったのは「指示」であった。4学級の4単位時間のすべてで「指示」が最も多かった。次いで、「説明」「確認」が多かった。

Table 3. 国語科の授業における授業コミュニケーション

	1年	2年	4年1	4年3
分類項目	内訳 (%)	内訳 (%)	内訳 (%)	内訳 (%)
12.説明	32%	26%	24%	20%
13.提示	1%	3%	3%	5%
14.指示	39%	31%	43%	46%
15.閉じた質問1	4%	8%	4%	1%
16.閉じた質問2	7%	6%	7%	0%
17.開かれた質問	3%	3%	1%	4%
18.確認	13%	24%	17%	25%
合計	100%	100%	100%	100%

(2) 算数科の授業における授業コミュニケーション

授業コミュニケーション分類7項目中、最も多かったのは「指示」であった。4学級の4単位時間のすべてで「指示」が最も多かった。次いで、「説明」「確認」が多かった。

Table 4. 算数科の授業における授業コミュニケーション

	1年	4年1	4年4	5年
分類項目	内訳 (%)	内訳 (%)	内訳 (%)	内訳 (%)
12.説明	10%	16%	11%	14%
13.提示	2%	6%	4%	2%
14.指示	53%	36%	31%	38%
15.閉じた質問1	5%	5%	4%	11%
16.閉じた質問2	6%	2%	2%	8%
17.開かれた質問	1%	9%	2.2%	5%
18.確認	23%	25%	27%	23%
合計	100%	100%	100%	100%

(3) 社会科の授業における授業コミュニケーション

授業コミュニケーション分類7項目中、最も多かったのは「指示」であった。4学級の4単位時間のすべてで「指示」が最も多かった。次いで、「説明」「確認」が多かった。

Table 5. 社会科の授業における授業コミュニケーション

	4年2	4年3	5年
分類項目	内訳 (%)	内訳 (%)	内訳 (%)
12.説明	8%	17%	21%
13.提示	1%	13%	5%
14.指示	49%	38%	27%
15.閉じた質問1	5%	2%	10%
16.閉じた質問2	4%	1%	9%
17.開かれた質問	1%	6%	10%
18.確認	31%	22%	19%
合計	100%	100%	100%

(4) 結果

3教科11単位時間の授業全てにおいて、最も多い授業コミュニケーション項目は、「指示」であり、次いで、「説明」「確認」となった。教科による大きな違いは見られなかった。今回、対象とした授業は日常行われている授業であることを考えると、小学校の授業の特徴が表れていると言えるのではないだろうか。

今回の記録をみると、指導内容についてだけでなく、ノートの書き方やプリントの扱い方など、学習技能に関することがらについて、教師は細やかに「指示」をしている。また、教科書や黒板などのどの個所に注目するのかを指示している。こうした細やかな指示によって児童の学習への集中が推進される。

また、「説明」が多いのは、授業で伝える内容をより受け入れられやすいものとするために必要不可欠である。

「確認」が多いことは、「指示」や「説明」の聞き落としが無いのか、「指示」が確実に受け取られているかを把握するために必要な行動である。授業で扱われる内容は、児童にとって原則として「初めて学ぶことがら」であるから、「説明」して「指示」して「確認」という3つの項目は、欠かせないコミュニケーションである。

一方、「閉じた質問1・2」は、既習のことがらや、提示された課題に関することがらについて問うもので、記憶の想起を促したり、方法を選択したり、理解の度合を確かめたりといった場面で用いられている。

「開かれた質問」は、課題を与えて考えさせる場面で使われている。「もっと、よい方法はありますか」「このことについて、どのように考えますか」「登場人物はどのような気持ちだと思いますか」など、思考を働かせて、個々の考えを明らかにさせるときに使われている。「開かれた質問」は、授業の目標に到達しようとするものであるので、授業の始めに、目標として問われる場合と教師の説明や指示による学習経験の積み重ねの後に、理解の集大成として問われる場面が多い。「質問」は、教科内容の理解を踏まえて行われるものであるため、数は多くは無い。「閉じた質問」が適切に発せられれば、学習者としての児童の認知がより確実なものとなるだろうし、「開かれた質問」の精度が高ければ、教師と児童の双方が思考をめぐらす「構成主義」的な

学びの機会となるだろう。

教師の「説明」「指示」「確認」による内容の伝達に基づいて、児童は教師の「問い」に応じている。7名の教師は、「説明」「指示」「確認」を繰り返しながら、「閉じた質問」「開かれた質問」を適切に配置し、主体的な学びへの基礎を築いていると言える。

今回、これらの授業コミュニケーションの量的な把握をしたことで、各教師の授業コミュニケーションの実際は似た傾向にあることがとらえられた。

小学校教育において、児童が獲得する、すなわち学習する内容は、この先に続く学習の基礎基本である。学習する必要があることがらは、教科内容だけでなく、学習に必要な技能が含まれる。これが、初等教育の特徴であり、「学習理論」としては「行動主義」であり、学習の主体が教師にあることは、やむを得ない面がある。

一方、7名の教師の授業コミュニケーションの精度については、さまざまな課題もみられる。

授業は、教授者と学習者の間で大部分を言語でのやりとりをするものであり、初等教育で言えば、教師と児童の間で、何らかの知識技能の獲得を目指して行われる特殊なコミュニケーションである。多くの教授—学習研究は、教授—学習の枠組みについては示唆を多く与えてくれるものであるが、実際の伝達状況については、個々の教師の判断に任されている実態がある。そのため、伝達の精度についての検討は十分とは言えない、コミュニケーションの観点から考えることによって、教師の伝達の精度が明確になると考える。

現状では、教師の授業コミュニケーションの精度という考え方は、ほとんど注目されていない。

授業コミュニケーションを理解した教師は、より適切に児童の思考に働きかけることができる。教師の授業コミュニケーションの精度は、授業評価であり授業改善を進めるものである。

2. 発話の検討

教師の発話は、授業コミュニケーションとしてどのように行われているかをそれぞれ実際のスクリプトに基づいて、検討した。

【授業開始時の発話の実際】

授業開始時の発話の特徴を把握したものを述べる。

(1) 1 学年国語科の授業

この授業は、説明的文章の「じどうしゃくらべ」という教材の発展である「じどうしゃずかんをつくらう」という内容を取り上げている。前回の授業では、児童が図鑑にのせる自動車の種類を選択しており、この発話の前に、一人一人が選択した自動車の資料と自動車図鑑としての記述を記入するワークシートの配布が行われている。

それを受けて、配布資料に記す内容を想起させることから、授業が始まっている。児童はこれまでの学習で、自動車の仕事と作りについての記述のしかたを学んでいる。

この授業で取り組むことを「○○」とクイズのように表現して想起させ、課題を指示している。また、ペアで答えを確認するよう指示している。児童が自分の選んだ自動車の仕事と作りを記述するという目標に取り組ませるために、仕事と作りを調べて記入するということと、自力でワークシートへの記入をすることを指示し

ている (Table 6)。

(2) 2 学年国語科の授業

この授業は、説明的文章の「馬のおもちゃの作り方」という教材で学んでいる、おもちゃの作り方の手順を実際に書くという学習の導入の部分である。

前回の授業で、自分の作ったおもちゃを説明するための手順について学習したことを想起させ、確認している。

この授業では、下書きを書くことを伝えるとともに、既習の「順序を表すことば」を復習することから始めると説明している。

順序を表すことばの用例を記入するワークシートを配布し、ワークシートに記名するよう指示している (Table 7)。

(3) 4 学年国語科の授業

この授業は、説明的文章の「世界に誇る和紙」という教材で学んだ説明文の書き方の技能を

Table 6. 1 学年国語科

	発話	分類
13	今日は自動車図鑑を作るのに、昨日選んでもらったので、これのマルマルマルとマルマルマルを調べて欲しいんです。	指示
14	はいペアで立って相談どうぞ。よいしょ。	指示
15	一つ目のマルマルマルは、なんだ。せえの。正解。もう一つは。せえの。仕事。	閉じた質問2
16	はい仕事と、作りを調べていきたいと思います。さあここからは皆さん自分の力です。	提示

Table 7. 2 学年国語科

	発話	分類
1	はい、お願いします。では昨日、昨日やった授業は自分の作ったおもちゃを説明しようってところまでやりましたんで、みんなには、段落というか、説明する手順みたいなものを書いてもらったよね最後ね。覚えてるそこまでは。	確認
2	今日はまだ本番書きではないです。本番書きの一步手前。でやるのは、順序を表す言葉をまだ全然まとめてなかったの、まず先にそっちをまとめたいと思います。	説明
3	ちょっと一応プリント配るので、名前を書いてください。先生も知ってたけど。でも先生、一気に出しちゃうんだけどね。順番。ええ、ごめんね。初めての試みで。よいしょ。はい。入れて。あれ余んなかった。ありがとう。お願いします。	指示

使って、児童が伝統工芸を紹介する文章を書く活動をすることを目標としている。

前回の授業までは、「要約」の技能を学習してきたことを想起させ、ここで区切りをつけて、新たに説明文を書く学習に入ることを説明している。

社会科で地域の伝統行事に関する学習を経験しているので、工芸だけでなく行事でもよいということを説明しようとしている。文章を書く活動に入るために、児童の理解を深めようと考えて、教師が自分の経験を文章にして、見本として提示している (Table 8)。

(4) 1 学年算数科の授業

繰り下がり引き算の減加法 (10 から引いて残りを足す) という考え方を学ぶことが、目標の授業である。

「ノートを開く」「下敷きを入れる」「鉛筆を正しく持つ」といった、学習に必要な基本的行動

様式を指示することから始まっている。1 年生の指導としては、基本的なことからである。

その上で現在、学習していることがらを想起させ、何について学習しているかを説明している。

具体的な計算問題を提示し、ノートに書かせている (Table 9)。

(5) 4 学年算数科の授業

算数は少人数指導のため、普段の学級とは異なる学習集団になるので、児童の教室移動がある。担当教師は、自分が担当しているクラスのメンバーが、間違いなく揃っていることを確認することから、始めている。教室を間違えている児童がいたので、行くべき教室を指示している。

授業の初めに、面積の学習が始まることを伝えたが、出席児童の確認が入った。その後ワークシートを配布し、それから授業の目標を提示

Table 8. 4 学年国語科

	発話	分類
17	はい、ではええと、国語の世界に誇るまちで要約する力と良さが伝わる文章を書けるようにするって力をまあ、多分つけたと思うので、国語と社会合体して伝統工芸の良さを伝えるっていう学習に入ります。	説明
18	社会と国語で合体して、でもまあ、社会の時間ではもうやらないので、まあ、国語で伝統工芸の良さを伝えていきたいと思います。	説明
19	では、私が作ってきました。お手本。私が伝えたい伝統工芸行事。伝統工芸でも行事でもないのを選んでしまったんですが。	提示

Table 9. 1 学年算数科

	発話	分類
1	はい。よろしくお願ひします。それでは始めていきたいと思ひます。ノートを開きましよう。鉛筆用意。下敷き入ってますね。持ち方くんもつけてますね。	指示
2	今日は12月のろく日だっけ。なんて読むんだっけ。せえの。はい。六日です。	閉じた質問2
3	6日水曜日はいめあて書きます。	指示
4	今皆さんがお勉強してるのは、なんていう引き算。くから始め、はい。ペアで確認どうぞ。繰り上がりだけ。増えちゃうの。どっち。相談してごらん。	閉じた質問2
5	何の引き算ですか。せえの。はい繰り下がりの引き算、繰り下がりのある引き算のお勉強をしています。今日は。	説明
6	16引く7の計算の仕方を考えてほしいなと思ひます。今日のめあて。16引く7の計算の仕方を考えようです。ノートに書きます。	提示

している (Table 10)。

のち、既習事項の説明をしている。また、既習の公式を唱えるよう指示している。

(6) 5 年生算数科の授業

新たな図形の面積の学習に入ることを伝えた

この授業では、台形について学ぶことを説明。ノートを開くよう指示、続けてノートの書き方

Table 10. 4 学年算数科

	発話	分類
5	では、今日から面積の学習が始まりました。今日〇〇さんお休みですか。〇〇さんもお休みですか。	確認
6	ちょっと呼んでいきます。教科書を閉じたままノートを開いて待っててください。	指示
7	〇〇さん〇〇先生の教室です。いませんか。〇〇さん〇〇先生のクラスです。	確認
8	〇〇さん、自分の教室に早く行ってください。	指示
9	では、今から花壇の絵を配ります。貼らずに見てください。	指示
10	はいどうぞ。はいどうぞ。はいどうぞ。はいどうぞ。	提示
11	では、花壇の絵を見てください。えこの花壇はどれも周りの長さが同じです。いろいろな花壇がありますね。どの花壇が広いか比べてみましょう。	提示

Table 11. 5 学年算数科

	発話	分類
5	はい、それでは今日は新しい図形に入りますが、平行四辺形の求め方公式さんはい、そうだね。	説明
6	底辺かける高さ。言ってみな、間違っ覚えてちゃうから。三角形の公式、さんはい、声揃えて、さんはい、OK。	指示
7	ちょっと早かった。じゃあ、え今日はね別の図形台形って図形覚えてる。台形に行きたいと思います。	説明
8	ノート開いてください。13じゃないな。11。ほんとだ逆にしちゃった。ごめんなさい。	指示
9	皆さん逆にしちゃったので、もうそのまま書いた人はそのままでもいいしあの逆にしてもいいです。	指示
10	問題台形 CD の面積、何平方センチメートルですか。	提示
11	置いてきたら。使わないなら、置いておいて。後ろの席の子気になっちゃうから。	指示
12	はい、えーそれでは今日は台形なんだけど、今まで平行四辺形の面積の公式も習ってなかった時平行四辺形の面積ってどうやって求めた	確認
13	一部を切って形変えたのを覚えてる。平行四辺形何に書いたんだっけ。長方形に変えたよね。三角形も。だから今までは形を変えてたんだよね。変えて面積最初は求めてました。	確認
14	今日もっていうことは台形もね。同じようにできそう。で、何に変えればできるかね。はい、というわけで今日は台形の面積求めていきましょう。	提示

を指示している。この後、問題を板書し、提示している。

ここまでは学習準備の段階である。

続けて、既習事項である平行四辺形の面積を求めた際の学習を想起させ、ついで、図形の花積を知るための具体的な方法を想起させ、確認している。

想起した学習経験をもとに、台形の花積の求め方を考えることが、この授業の目標であることを提示している (Table 11)。

(7) 授業開始時の発話の傾向

1) 既習事項の想起を行っている

- ・1年生国語科の授業では、「○○」は何かと児童に問うて、前時までに学習した「仕事とつくり」を想起させている。
- ・2年生国語科の授業では、「説明する手順を書いてもらったよね」と説明の手順を想起させている。
- ・4年生国語科の授業では、「要約する力と良さを伝える文章を書ける力をつけたと思う」と伝え、前時までの学習を想起させている。
- ・1年生算数科の授業では、「今お勉強しているのは、何て言う引き算」と問い、繰り下がり引き算であることを想起させている。
- ・5年生算数科の授業では、平行四辺形と三角形の花積の公式を唱えさせることと「今まで平行四辺形の花積を習っていなかったとき、平行四辺形の花積ってどうやって求めた」と話し、これまでの学習経験を想起させている。

4年生算数科の授業のみは、「面積」の学習はこの学年から始まる新規事項の学習であるので、直接関連する既習事項の想起はしていない。しかし、広さ比べをさせることは、これまでのさまざまな量の比較の学習経験を基に考えさせる活動であることを考えると、間接的には既習の学習経験の想起であるといつてよいと考える。

このように授業の始まりの発話には、既習事項の想起に関する内容が共通して存在している。

2) 授業目標の提示をしている

- ・1年生国語科の授業では、「仕事と作りを調べていきたいと思つます」と、目標が提示している。
- ・2年生国語科の授業では、「順序を表すこと

ばを、まだ全然まとめていなかったの、まずそつちを先にまとめたいと思つます」と提示している。

・4年生国語科の授業では、「国語と社会、合体して伝統工芸のよさを伝えるつという学習に入ります」と提示している。

・1年生算数科の授業では、「今日の日当て。16-7の計算のしかたを考えようです」と提示している。

・4年生算数科の授業では、「どの花壇が広いか比べてみましょう」と提示している。

・5年生算数科の授業では、「今日は台形の花積求めていきましょう」と提示している。

授業の始まりには、目標の提示が共通して存在している。

この共通する内容から、教師が、1単位時間の授業の始まりという部分を、既習事項の想起から入つて、授業の目標の提示で締めくくるとついう形式で進めていることが分かる。これによつて、学習内容はつながっていることが、児童に伝えられる。この繰り返しが、学習内容の獲得の積み重ねとなつていくと考える。

(8) 授業開始時の発話の意味

授業開始時の発話は、授業の進行についての理解と本時の学習についての意欲の喚起に結びつことが望ましい。意欲の喚起について言えつば、児童自身が、この授業に必要な前提となる条件としての知識技能をこの時点で「保持している」とついう認識を得ていることが必要である。これから学ぶ新たな課題に立ち向かう手立てを持つているという自信は、意欲を支えるものとなる。新たなことがらに出会つとき、全く未知であることは、不安を生む。不安は、新たな課題に向かう意欲を阻むことがある。それを理解しているの、教師は前回までの授業内容を想起させている。

また、何をどこまで求められているのか不透明な、見通しの無い時間の始まりも、児童に不安を持たせるものとなる。そこで、教師は、この授業時間の学習の目標を提示しているのである。

これまで述べてきたように、今回の調査結果に表れている教師の発話は、形式的には、既習事項の想起から授業目標の提示という流れて、

整理されている。

5年生算数科の教師は、この時点で具体的に過去の学習内容を取り上げ、これまでの学習内容の何を使って今回の学習に向かうかを伝えている。これは、具体例を挙げて想起させているので、児童にとって学習の手掛かりとなる。

限られた授業時間(45分)の中で、このことによるどの程度割くかは授業者の判断だが、発話に表現された想起の内容は、その授業における児童の学習に影響するという認識が必要である。学習における想起の重要性についての指摘はあるものの、授業における具体的な想起のさせ方やタイミングについての検討は十分ではない。

また、授業の目標の提示の仕方についても同様のことが言える。

(9) 児童と教師の発話の交換

授業内の教師の発話は、すべてが目標を志向したものばかりではない。目標を志向した発話の間に、児童とのやりとりとなる発話が存在する。特に、小学校低学年において、この傾向は強い。

児童は、教師の発話を無言で聞いているわけではなく、発話に反応して、それぞれに言葉を発している。これを「子どものつぶやきを聞く」といった実践の方法が取り上げられているが、多くの授業では教師の発話に即座に子どもの発話が返されている。

授業内の教師の発話は、ほとんどが意図的なものだが、児童の反応に即興で返す発話もみられる。

・1年生国語科の授業では、「一つ目の〇〇は何だ？せえの。正解。」と、児童に問いかけて、一斉に応えさせ、「正解」と返している。

・2年生国語科の授業では、「先生も知ってたけど。でも先生、一気に出しちゃうんだけどね。順番。ええ、ごめんね。初めての試みで」と子どもからの問いに返している。

・4年生国語科の授業では、「では、私が作ってきました、お手本。私が伝えたい伝統工芸、行事。伝統工芸でも行事でもないのを選んでしまったんですが。」と弁明している。

・1年生算数科の授業では、「今日は12月のろく日だっけ。なんて読むんだっけ。せえの。はい。六日です」と言い、6日の読み方を「むいか」と答えさせている。

・4年生算数科の授業では、「はいどうぞ。はいどうぞ。はいどうぞ。はいどうぞ。」とプリント配布の際に一人一人に声をかけている。

・5年生算数科の授業では「13じゃないな。11。ほんとだ、逆にしちゃった。ごめんなさい。」と自分の誤りを謝罪している (Table 6-11)。

これらの発話は、指導内容に直接かかわるものばかりではない。しかし、誤りを指摘されて謝ったり、児童の問いに答えたりする発話は、教師と児童の関係の構築に関わるものであり、その際の表現は、両者の関係に大きな影響を及ぼすと考える。

VI. 考察

今回、授業記録の分析・検討の結果、授業におけるにおけるコミュニケーションには、パターンがある可能性が把握できた。

一点目は、授業全体に授業コミュニケーションの流れには、一定の傾向がみられるということである。

授業全体を通してみると、説明・指示・確認が多かった。教科の違いや教師別に見ても、大きく異なっていないことから、教師の授業コミュニケーションは、ほぼ同じ傾向を示すことが考えられる。今回は、7名の教師の11単位時間の授業の検討であるが、記録したすべての授業が同じ傾向を示していることから、このパターンは一般的である可能性がある。

小学校段階の指導は、児童に教科の内容についての知識・技能を獲得させると同時に学習全体に求められるさまざまな学習技能(例えば「重要な点にサイドラインを引く」とか「表に分類して書く」など)という二つの面を伝えている。こうしたことから、授業コミュニケーションは教師による説明・指示・確認が多くなると考える。

授業には、教師が基礎となることがらを説明し、活動の指示を与え、誤りなく活動されているかを確認するという流れが存在する。説明・指示・確認が適切に行われることで、学習の基礎が培われ、それをもとに「開かれた質問」によって課題を与えられて、児童は思考を働かせる。課題を与えられるだけでは、個々の児童は

学習ツールを持ってない。また、集団での学習の共通の基盤も築けない。説明・指示・確認は、学習を確実なものとする教師の基本的な技能である。

筆者は、これまで初任者研修等で、初任者に対して指導にあたる教員が部分的に発話についての指導をしているのを見たことがあるが、体系的に授業内の発話が指導されていない。

今回、実際の授業における発話がこのようなコミュニケーションのパターンを持っていることを把握したが、授業コミュニケーションパターンが明確になり、効果的な活用も明確になれば、教師の授業改善に資することができると思う。

そして、教師が意識することのないままに、日々の授業で行っている発話の課題を、教師自身が自覚することも可能になる。発話が、児童の理解に対して的確に行なわれれば、児童—教師間のコミュニケーションの改善にもなる。

これらは、教師の指導力の内容であり、専門性をなす部分であると思う。今回の、授業コミュニケーションのパターンの把握から、教師の授業コミュニケーションについて、より多くのデータを収集することで、より適切なコミュニケーションのパターンを見出せるのではないかと考えている。

二点目は、授業の流れの部分ごとにもパターンがあるのではないかとということである。

今回、授業の初めの部分のみを検討したが、ここにも前回までの授業内容の確認と新規の学習の目標の提示というパターンがある。小学校の授業は、その1単位時間の授業で完結するものではなく、学習は緩やかに連続している。その連続性を保つ働きかけが、確認—提示のパターンとして行われている。

今回は、6名の教師の授業について検討したが、6名すべてがこのパターンであった。これが一般的であるか否かをここで判断することはできないが、授業コミュニケーションには、授業の進行によるパターンがある可能性が認められる。授業の進行に応じて、どのようなコミュニケーションのパターンがあるのかを明らかにすることで、児童にとって分かりやすい進行を構成することができると思う。

Ⅶ. 今後の課題

授業の要素をいくつかあげたとしても、それらの要素を具現化するのは、教師である。それも教師の発話を中心となって行われるものである。授業における教師の発話は、児童生徒の知識技能の獲得というゴールを目指して行われるものであり、かつ児童生徒の集団との交流に配慮する必要があるものである。

授業内の教師の発話は、①教師が主導する、②ゴールが決まっている、③児童生徒との交流が求められるという制約をもつコミュニケーションである。

現在、授業におけるコミュニケーションについての検討は十分に行われているとは言えない。暴言や安易な返答といった不適切な言動として取り上げられることがあるが、倫理的な問題として処理されがちであり、教師の技能としての検討はされていない。教師の個人的な特性の問題として取り上げられているだけでは解決が困難な現状がある。

例えば、「学習者の注意を獲得する」際に、どのような発話を選択することがよいのか、教師自身にどのような傾向があるのか、を自覚する方法が明確でない。検討する方法を明らかにすることで、教師自身が、自分はどのように児童の注意の獲得をしているのか、どのようなコミュニケーションが必要であるかについて自覚を持つことができる。つまり、授業内のコミュニケーションの自己評価が可能になる。

今回の検討で、教師の授業コミュニケーションには、パターンがある可能性がとらえられた。授業におけるコミュニケーションの意義は、更に多くのデータによって明らかにする必要がある。

今後多くの事例の分析を通して、授業コミュニケーションのあり方を検討し、学校における研修・研究の支援を行っていきたいと考える。

【文献】

- 1) 「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」審議会まとめ 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会 令和3年11月15日
- 2) 学習指導案を対象とした学術論文の研究動

向に関する調査 日本教育工学会研究報告
集 2023(1), 151-154, 2023-05-05

- 3) 鈴木克明 教授・学習過程の革新—教授設計論 (Instructional Design) の視座からの提言— 東北大学 高度教養教育・学生支援機構紀要第3号 P13-p26 2017
- 4) 後藤千颯・林宏樹・笹嶋宗彦 学習理論の体系に関する調査とオントロロジーを活用した PBL 演習のモデル化 人工知能学会 インタラクティブ 情報アクセスと可視化マイニング研究会 (第31回) SIG-AM-31-06
- 5) 芳賀明子 (2021) 教師の授業コミュニケーションの分類—小学校教員の授業におけるコミュニケーションの分析と検討— 帝京短期大学紀要 №22 pp175-182
- 6) 芳賀明子 (2022) 授業コミュニケーション分類の実践的活用—授業コミュニケーション分類に基づいた授業改善— 帝京短期大学紀要 №23 pp99-110

Teachers' communication in class

—Classroom Communication in the Speech of Elementary School Teachers—

Akiko HAGA

Department of Living Science, Teikyo Junior College

【abstract】

【Problem / Purpose】

The acquisition of new knowledge and information and the acquisition of some skills are now possible by various contents offered on the Internet. However, in order to utilize the Internet and know what you want to know, the ability to utilize language and the ability to have a prospect are indispensable. And, the fact that non-face-to-face communication has deeply entered into the life increases the necessity of the utilization ability of language and the reasoning ability of what is in the background of language more than ever. Considering that non-face-to-face communication will increase in the social life in the future, I think that the experience itself of receiving transmission by direct communication has an important meaning. The communication experience in school education has an even greater meaning. Therefore, the skill of "how to transmit" of a teacher is the quality ability as an important teacher. For children and students, "how to be transmitted" has a great influence on the acquisition of learning contents. Nevertheless, it can be said that there is no logical and intentional training on the part of teachers about this. The author thought that training focusing on "to transmit" itself was necessary, and so far, he has conducted research on training from the viewpoint of class communication and understanding of class communication. This time, the research was carried out for the purpose of arranging the actual condition of class communication in the class (it is not examined and prepared like the research class) which the teacher carries out daily, clarifying the problem of class communication and the direction of improvement, and obtaining the clue of the measure which becomes the support of class improvement.

【Key words】 Speech class communication, Actual class communication, Class communication classification